



ピッポ新聞

2008

10

No.236

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

ピッポ

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

季節をシヨギングする

爽快なり！喜びなり！

ぼくは週に1〜2回シヨギングをしています。おりに触れてこの紙面でも書きましたから、ご存知の方もいると思います。今月もちよつとそのことについて。(またか、何て言わないでください)

近くの有度山(頂上は日本平)を走るので、山道は縦横無尽ですから、走るコースは、そのときの気分と体調によって時々変えています。時間的に余裕があるときは、これまで走ったことのない道に挑戦します。思わぬところに出て、ビックリすることもありますから、これが結構おもしろいのです。

ごくたまに、道が無いところを歩きます。こういうときは走るのではなくて、草やボサのなかをただただ突き進んでゆくのです。でもね、この山は子どもの頃からイタズラの場所だったので、迷うことはまずありません。どんな山も尾根筋と谷筋からなっていますから、尾根を行けば必ず道に出ます。

何故ぼくは普通の道路ではなく、山の中を走るのがかと言えば、自分の身体で季節を感じる事ができるからです。これがぼくには、喜びなのです。ですから、室内でランニングマシーンの上を走るなど、ぼくには絶対考えられないことです。

それに山からは、季節ごとに自然の恵みをちよつ

とだけ、お裾分けして貰えます。山とも言えないような有度山ですが、案外自然からの贈り物はあるのです。春はミツバ・セリ・ワラビ・タケノコ・路・タラ芽など、初夏は木イチゴ・山グワの実・秋はヤマイモ・アケビ・クリなどがとれるのです。めずらしいのでは、キクラゲやイグチなどのキノコもね。地元の知り合いは、ホンシメジもあると言うけど、ぼくはまだお目にかかったことはないな。そういえば、子どもこのころ松茸だって採れたものね。

何だか「花より団子」を地दैいっているのを白状したようなものですね。シヨギングの途中で、木イチゴや山グワなどは口に放り込んでのどを潤したりしますが、ほとんどは目星をつけて改めて採りに行きます。タケノコや山芋は、道具もいりませんからね。

シヨギングをしていると季節の移ろいは、鼻からも、耳からも。目からも感じるのです。桜の花も散って、竹の子堀も終わった時季、「トツキヨ、キヨカキヨク トツキヨカキヨク」なんて鳴き声がしてきます。初夏の鳥ホトトギスです。このころ川の土手にはスカンポが伸びています。茎を噛ると酸っぱさが口の中に広がります。シヨギング途中の渴きを癒してくれます。

いまの時季は、臭いから秋を感じます。

出発の芝生公園から、県立美術館の裏手を登っていくのですが、その間に植え込みからキンモクセイの香りが漂ってきます。さらに走れば、山道の脇にはクズや萩の花を目にします。山芋のツルも気になる頃だ！ 先日良いの一本見つけたけどね。 爽快なり、シヨギング！

ヒアソキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第五回

”どのくちばし”

素晴らしい”

動物学者 今泉吉晴

動物物語の新しい様式

カナダの批評家ジェイズ・ポークは、動物の本当のくらしを描くアーネスト・T・シートンが創案した、新しい様式の動物物語を高く評価しました。シートンの最初の作品であるウサギの成長物語『ラギーラグ』（作品の原型は「セント・ニコラス誌」の1890年12月号に掲載）をとりあげて、その特徴は「ウサギ語を英語に翻訳する手法を見いだしたことにあり」と指摘しています（Wilderness Writers、James Polk、1972）。

なるほどそのとおり、シートンは『ラギーラグ』の前書きにこう書いています。ラギーラグは、ワタオウサギの小さな男の子です。……ウサギは人間の話し言葉は使いません。けれど、ウサギも自分たちの考えや気持ちを互いに伝え合う音声、サイン、臭い

のしるし、触毛の感覚、身ぶりや表情、そしてお手本といったような、人間の言葉に似た「ウサギの言葉」をもっています。私はこの物語の中で、「ウサギの言葉」を人間の言葉に訳して、読者のみなさんにお伝えします。私は訳すときに、ウサギがいつていないことはひと言もつけくわえない、と誓います。

ポークの指摘から、読者へのシートンの誓いはノンフィクションの動物文学の誕生を告げる宣言だった、と理解できます。

ラドヤード・キプリングは1895年に、『ラギーラグ』を読んだことが『ジャングル・ブック』（1894年）を書く大きな刺激になったと、シートンに伝えています（Trail of an Artist-Naturalist、Ernest T. Seton、1941）。

大枠はフィクション、 細部はリアリズム

もちろんシートンの動物物語は、動物の言葉や人間の言葉に翻訳したただけのものではありません。シートンは自然が動物や人を鍛錬して、生きるための確かな技と知恵を身につかせ、個性をのばすものであることに深い関心を持っていました。みなが同じことをして競争しあうのではなく、独自の道を切り開いて生きるよう子どもを励ました。そこで、どの動物物語にも傑出した一個体の動物をとりあげて、その生き方と個性を描きました。

人が自然の中でくらす野生動物の生涯を完璧に記録することはできません。シートンの動物物語に登場する傑出した一個体は実在の動物ですが、いくつかの他の個体の記録をあわせてストーリーをおぎない、エピソードや行動の細部は自分の目で見たりシートンの動物物語は、大枠にはフィクションが付きものでも、細部は事実の記録そのもので、実在の傑出した一個体の生涯を描きました。



『ラギーラグ』の挿絵

クロヘビに襲われるラギーラグ。巣で一人過ごしていた幼い子ども時代、じつと動かないこと（フリーズ）が何より大切と学んだ。E.T.シートンによる挿絵の原画より。

Ernest Thompson Seton works courtesy Philmont Museum-Seton Memorial Library

成長物語である『ラギーラグ』は、動物がどのようにして自然の中で生きる技と知恵(シートンはそれをウッドクラフト)「森で生きる技と知恵」と呼びました)を身につけるものであるかを読者に感動的に伝えていきます。

1896年にキプリングに会ったシートンはウッドクラフトこそ教育の目的であり、真の学校であるといつて、子どもが先住民の森の知恵と文化に学ぶことの大切さを語りました(シートンは人と動物は同じと考えていました)。

するとキプリングは、「では君はその夢を実現するために今、何をしている」と、と問いました。シートンがウッドクラフトのハンドブックを作っている、と答えると、ハンドブックでは誰も読まない、小説にした方がいいと提案してきます(B. a Thousand Fires、 Julia Seton、 1967)。

しばらくして、シートンの子ども時代の開拓生活を紹介しながらウッドクラフトを伝える物語『二人の小さなインディアン』(1903年)が刊行されました。

シートンと旧ソ連の作家たち

シートンの動物物語は、旧ソ連の作家にも影響しました。伝記作家ナタリア・ネウイミナが書いたニコライ・スラトコフの評伝に、「(スラトコフは)ピアンキとの友情を深めるにつれてシートンが好きになっていった」という記述があります)

、1988)。

スラトコフはレニングラードの整備された自然公園より、郊外の荒れはてた沼地に惹かれました。ネウイミナはスラトコフのこの好みにふれて、シートンがトロント郊外の沼地で「バスコ・バルボアが太平洋を発見し、あるいはラ・サールがミシシッピ河を発見したときのような高貴にして清廉な感動を味わった」と書いているが、その通りの感動を追体験していた、と言っています。

H・テムチナが訳出したロシア語版『二人の小さなインディアン』(1960年)にピアンキとスラトコフは連名で解説をよせ、こう書きました。

「半世紀前まで、人間と動物は同じという考えは人間を侮辱するもの、と見なされました。……そんな風潮の中にあつてシートンは世界で初めて本格的な動物物語を書きました。……シートンの動物物語は動物文学にまったく新しいリズムを打ち立てました。……まさしくそれは、この偉大な作家の偉大な文学的寄与であり、作品が世界中で広く読まれた原因でしょう。……」

私たち二人は二つの別の世代の人間ですが、毛や羽につつまれた血縁者をたたえる美しい歌の歌い手であるシートンに、子どものような心底からの敬愛の念をいだいています。

シートンの動物文学の受容

前号で私は、動物物語で動物を人間のようにしゃべらせるラドヤード・キプリングを批判するコンラート・ローレンツの言葉を紹介しました。ローレンツは、動物物語で動物にしゃべらせることができるのは「実際に動物を知っている人だけ」と書きました(『ソロモンの指環』、ドイツ語原本は1949年)。

しかし、以上にあげた人のつながりから、ローレンツのリアリズム重視は一つの立場にすぎず、観察記録だから作品を書くリアリズムの作家からナチュラリ・ヒストリーを書くつもりはないキプリングにいたるまで、シートンの動物物語は多くの作家に受け継がれている、と理解できます。

津田櫓冬氏は「リアリズムよりも、ある場合には、虚構がはるかにものごとの真実に迫ることがあるのかもしれない」と問い、「ノンフィクション」という橋脚の骨組みに、真実という名の強力な補強材の役割を、そして論理的裏付けを、フィクションが果たしている事を、映画に教えてもらいました」と書いています(『フィクションの存在感』、「日本児童文学」、1995年5月号)。

シートンの動物物語を念頭においた論ではないのは明らかでしょうが、まるでその解説でもあるかのように読めます。

私がここで19世紀の末から20世紀の初頭に確立された新しい動物物語の性格と伝播の様を見ておきたかったのは、『だれのくちばしが もっといいか』の二つの版の読

み比べもいよいよ最後の節にかかり、二つの版の特徴をとらえる段になったからです。この作品のテーマも、鳥が自然の中で食物を手に入れる（生きる）ための技と知恵であり、シートンのいうウッドクラフトです。しかし、この作品の場合、異なる種の鳥が会話をかわす物語の枠組みがフィクションであることは誰の目にも明らかです。

一方、文中の鳥のくちばしの形態と機能の説明はリアリズムそのものです。そして、今回あつかう最終の項では、フィクションの枠組みの中で、自然（鳥のくちばし）の姿を知る本当の方法が語られ、まさに津田氏が説く、虚構（フィクション）が真実に迫る展開を見せています。

虚構が真実に迫る

名作『くちばし』の二つの版の読み比べも、いよいよ最後の節、第十節「結び」の項の検討にかかります。この項は他の項にも増して、いかにも緻密な構成の息もつかさぬ展開の項です。一行一行が重い役割をはたしているのは、いつものことですが、急な展開ですので心を開いて、素直についていくことにしましょう。

結論が示される「結び」の項ですので、内容が題名とかかわっています。そこで題名の訳がどうあったらいいかの問題に少しだけふれておきたいと思います。

私は『ネバーランド』誌の批評で、この名作の原題「

（「だれのくちばしがもつといいか」を

田中友子氏が『くちばし どれが一番りっぱ？』と、訳しているが、「一番」はよくない、と批判しました。ちなみにこの連載では、私は「だれのくちばしがもつといいか」と訳しています。

- *6 Выстроились перед мухоловом-тонконосом дубонос, крестонос, долгонос, шилонос, серпонос, широконос, сетконос, мешконос и долбонос.
*7 Да тут вдруг упал сверху серый ястреб-крючконос, схватил мухолова и унёс себе на обед.
Остальные птицы с перепугу разлетелись в разные стороны.
*9 Так и осталось неизвестно, чей нос лучше.



オリジナル版「結び」の項

簡略版には最後の一行、*9（訳文では文章9）がないのが、大きな違いです。細部では、*7の下線部分（訳文では文章7の「そのとき」とつぜん）が「ところが、そのとき」になっているだけで、後は同じです。前半は省略（*6以降を掲載）。絵は縮小。この図は福音館書店より提供された、田中かな子氏訳による『くちばし』の底本のコピーより作成。ただし『くちばし』に底本の記載はなく、最終的な確認はない。

英語を使う人は、ロシア語の題名をどう英訳しているかを、ネットで調べてみました。二件みつけました。一つは、ロシアの観光サイトにあるビアンキ関連の名所の説明の中でこの作品を紹介していました。原題「

「whose nose better」と訳しており、私の「だれのくちばしがもつといいか」と同じ意味であり、もちろん、ロシア語の題名と同じように比較級を使って訳しています。もう一つは、アメリカのロシアの本を扱う古書店のサイトで、在庫のある本のリストに入っていて「whose nose is better」と訳していて、ロシアのサイトとほとんど変わりません。

今回の検討で私はこの名作の題名を日本語訳で「だれのくちばしがもつといいか」のように少なくとも比較級で訳さなければ誤訳になることを証明しますので、とりあえず読者のみなさんはこの作品の題名は『くちばし どれが一番りっぱ？』というような最上級であらわされるものではない、英語の「whose nose is better」のイメー

「結び」の項

の項の訳文をお読みください。最終節「結び」の項は二つの版でほとんど違いがないように見えます。実際、文章1〜8までは同じです。ところが、オリジナル版の最後の一文、文章9が重要な役割をはたしており、それが簡略版にないため

に、二つの版は決定的に違う物語になっていると、分かります。

文章1で、ヒタキがいつしよに旅してきた鳥たちみんなにいます。この物語で初めて設定された、ヒタキが鳥たちみんなに話をする場面です。

「とてもふしぎなことだね！」（文章1）と、ヒタキは旅の感想から話しはじめました。「いろんなくちばしを見て素晴らしくたけど、どのくちばしが一番いいか、まだ分かりません」と、できたこと、できなかったことを鳥たち全員に伝えます（文章2）。

この文章は仮の訳で、ロシア語原文の輝きをほとんど伝えていませんので（訳文の工夫はこれからします）、不足している部分を説明しておきません。

文章2で、ヒタキは出会った鳥の全てのくちばしの特徴と機能を知って、心の底から素晴らしいと思ひ、うち震えるような喜びを感じ、そして何ともいえず不思議な気持ちになりました。この描写がこの作品の要でしょう。

はじめ、ヒタキが素晴らしいと思えなかつたくちばしもありますが、鳥からくちばしの機能について説明を受け、あるいは実際にくちばしを使うところを見せてもらうと、そのよさを真から理解できました。

これらの記述は場面の設定、会話の成り立ち、会話の内容ともほとんど完全なフィクションです。ところが、2の文章の「すばらしかった」とか「どうしても わかりません」といった、素朴な言葉が対比され

て、喜びの大きさと認識の限界が小さな鳥らしく描かれている、と受け止めることができます。虚構が真実に迫る展開です。

それだけに、素晴らしくくちばしどうしをくらべて、どちらがよいかを選ぼうとすると、どれほど努力しても、やはりわからない、としかいいようがありませんでした。

すでにヒタキがキツツキに話した話から、私たち読者は、長いくちばしとか、くちばしに付属した網や袋の有無といったくちばしの個々の特徴をヒタキは理解している、と分かっています（ピツポ新聞9月号。キツツキの項）。

そのように個別のくちばしの特徴は理解できても、くちばしの全体から受ける素晴らしさと喜びと不思議な気持ちのゆえに、ヒタキはであった鳥たちのくちばしを、個別にくらべることができませんでした。

そこで文章3で、ヒタキはあらためて「きょうだいたちよ」と親しく仲間と呼びかけ、続いて4で「一列に並んでみてくれないか」と要請します。そして、5で、一列に並んでもらうのは、「一番いいくちばしを選ぶ」ため、と説明しました。

文章6で、「ハシボソヒタキのまえに」ハシブトシメ、ジュウジハシイスカ、ナガハシタシギと、この物語の中だけで、くちばしの特徴によって命名された「正式名」で鳥たちが紹介され、旅で出会った順に鳥たちが並びました。読者はこうして「正式名」で鳥たちが順に改めて紹介されたおかげで、それぞれの鳥のくちばしの形態と機能を思い起こし、物語を振り返ります。

第四回分オリジナル版訳

第十節 結びの項

1 とてもふしぎなことだね！ と ヒタキが 鳥たちに いいました。

2 いろんな くちばしを見て すばらしかったけど どれが 一番か どうしても わかりません。

3 そこで きょうだいたちよ。
4 いちれつに ならんでみて くれな
5 わたしが みんなの くちばしを み
6 みるから。

7 ハシボソ ヒタキのまえに ハシブ
8 トシメ、ジュウジハシイスカ、ナガハ
9 シタシギ、ソリハシシギ、ダイシャク
シギ、ハシビロガモ、アミハシヨタカ、
フクロハシペリカン、そして ツツキ
ハシキツツキが ならびました。

そのとき とつぜん。 空から
カギハシ オオタカが きゆうこうか
してきて ヒタキを つかまえると
ひるごはんに もっていつて しま
ました。

あとに のこった とりたちは びっ
くりぎょうてん あちらへ こちらへ
と とびちって にげていきました。
というわけで だれの くちばしが
もつといいか いまも わかりません。

こうして物語を振り返り、思い起こすうちに、突然、「空からカギハシオオタカが急降下してきて、ヒタキを捕まえ」運び去りました(文章7)。読者は驚愕し、衝撃を受けます。私も何回読んでも心臓がどきどきし、なぜヒタキが捕まってしまったのかと考え込まずにいられませんでした。

そして、自然界では当然のことと、無理に自分を納得させます。それでも胸の動悸はおさまらず、ふだんの読書ではあまり経験しない種類の深い心の動揺であると、ピアンキの物語の展開の巧みさに感じ入りました。

あとに残った鳥たちもドキドキは同じでしょう。そこで、次の文章8は、「鳥たちはびっくり仰天、あちらへこちらへと飛び散って逃げていきました」と続きます。どこへ鳥たちは飛び去ったのでしょうか。もちろん、自分の種にびつたりのみ場所だったでしょう。しかし、読者に分かる確かなことは、ヒタキがタカに運びさられて消えてしまった寂しさ、集まった鳥たちも見えなくなつて、あたりは消え入るように静まり返つた、ということなのです。

ここに描かれた鳥の群れのにぎわいと、群れが消えた後の静寂の描写には、フィクションではあつても現実の群れの存在感の描写そのものよつなりアルさがあります。次の文章9がない簡略版はここで物語が終わりですが、まずは、オリジナル版を読み上げることにして、文章9に進みましょう。

比べられない素晴らしさ

文章9はこうなっています。

「というわけで、いつたい誰のくちばしをもつといいか、今も分からないままです」この文章は、物語の最後に語り手(ピアンキ)が登場して型通りに物語の終わりの言葉を述べた、という形です(語り手は物語の最初の場面で、ヒタキの狩りの行動を説明して以来の再登場です)。そこで、簡略版がもつばらヒタキの物語として終わつたのに対して(それが特徴であるのに対して)、オリジナル版は語り手が終わりを告げるといふ、古い物語の特徴を持つ、と分かりません。

さて、私の文章9の訳文の内容を終わりの文章にふさわしい、と受け取ってもらえるかどうかは、もつばら先の要の文章がリアルに受け止めてもらえたかどうかによります。それと、寓話的な構成をとつているこの物語の終わりの言葉が真理をあらわしている、という受け止め方をしてもらえるかどうかによつています。

まず後の方の問題ですが、仮に真理として受け止めてもらえたら、どうなるかを考えてみたいと思います。真理ですから、これからも誰のくちばしをもつといいかは分かりません。ということは、これからも比べて優劣を決めることはできない、ということになります。

なるほどそのとおり、鳥が種類ごとにそなえているくちばしを含むあらゆる形態は、それぞれに固有の機能もち、それはその鳥自身に役立つだけです。くらべて特徴を

簡略版には、文章9(図1のロシア語原文では*9)がないのが、大きな違いです。細部では、7の下線部分「そのときとつぜん」が「ところが」のとき「になっています。後は同じです。

明らかにすることはできても、優劣を決めることはできないし、決めたところで意味がありません(けれど、人間は優劣を決めたりします)。

次に前の方の問題ですが、鳥それぞれのくちばしがあまりに素晴らしい、ということとを、ヒタキのように十全に受け止めることができれば、なるほど、比べて優劣を決めることはできない、でしょう。文章9はとても大切なことをいっているワケです。

ふつつ、寓話の終わりの言葉はモラルを告げて、教訓話の押しつけになりがち、といわれます。この作品の場合、同じ形を継承していますが、私はその心配はない、と思います。やわらかく、美しく、美しく、すこし残酷に語られ、すぐには分かりませんが、真理をつけているともすぐには分かりません。

読むたびに楽しく、美しく、少しずつ奥が見えてくる喜びがある、ピアンキはそのようにこの作品をつくっているのでしょう。作品の全体を意義あるものにする見事な結びの頂です。



田中かな子氏の訳による『くちばし』の表紙

以上がオリジナル版の結びの項の検討です。簡略版は、オリジナル版の最後の文章9がないだけの違いです。しかし、文章9はこの項の範囲をこえて、作品の全体に影響する大切な役目を果たしていました。それはヒタキが捕らえられ、食べられてしまつて分からなくなつたのは、「誰のくちばしをもつといいか、分からなくなつた」という論理的なおさえです。

1967年7月刊行。帯に「科学の芽ばえとして、物語絵本を！」と大書されている。私は「母の友」2006年2月号に『くちばし どれが一番りっぱ？』の刊行を「新たな試み」として「以前『こどものとも』で出た絵本を、もう一度別の視点でとらえ直して、科学の本として新たに出版する」という科学書編集長の手記を読んだ。ピアンキの作品をどう考えているのか、不可解だ

もし、このおさえがなかったら、ヒタキは「一番いいくちばしを選んでみせる」といつて、タカに捕らえられ、食べられてしまつたのだから、「今も分らない」のは「誰のくちばしが一番か」ではないか、と考えてしまつてしよう。

しかし一番は結果であつて、どんな競争でも、優劣の判定の積み重ねで一番は決まるのです。「今も分らない」のは優劣、「誰のくちばしをもつといいか」です。

そこにはつきりもどす働きをする文章9がない簡略版は、神秘的な能力で一番という託宣をつける神のようなヒタキがいた、という読み方をされるでしょう。それでは、それぞれの鳥が比べることのできない、素晴らしいくちばしをもつ、という作品のメッセージが失われます。

「一番りっぱ」への疑問

さて、以上の検討で、オリジナル版と簡略版の「結び」の項の読み比べを終えることにします。私は最後の項を読み終えたら最初から作品の要点を振り返つて二つの版を比較し、それぞれの特徴を明らかにするつもりでした。今、実際に終えてみると、どの項も不明な部分、放置したままにしている問題などさらに検討を重ねる必要のあることがたくさん見えてきました。また、それぞれの項で分かつたことを全体に反映する必要もあります。訳文も当然、書き直すつもりです。要は、二つの版を最終的に比較するどころか、早急にやらねばならないことがあまりに多いと知りました。そこで、作品の最初から要点を振り返つて特徴をさぐる作業は、次回からにすることにして、『くちばし どれが一番りっぱ？』の「結び」の項に関わる、ふしぎな訳語の問題にふれておきたいと思ひます。それをどのように考えたらいいか、という問題です。

私は今回の検討のはじめに田中友子氏が「一番りっぱ」という定型化した訳語(?)を用いることへの疑問を書きました。同じ「一番りっぱ」が今回検討してきた「結び」の項で使われています。

ヒタキが二回「一番」という言葉を使いました(文章2と5の二回)。これら二か所の他には「一番」は使われていません。田中友子氏はこれら二つの「一番」を「一番りっぱ」に置き換えています。例えば文章2にあたる文章を、田中氏は「うーん、いろんなくちばしがありすぎて、どのくちばしが一番りっぱなのか、わからなくなつてしまつたわ」と訳しています。私が今、問題にしたいのは訳文の全体ではなく、題名にある「一番りっぱ」が、そのままヒタキの話の中の「一番」に置き換えられている、どんな理由があつたのか、という問題です。題名の「一番りっぱ」は「もつ」といいか「置き換えていて、意識を重ねたことになりませう」。

まず、はつきりいえることは、ピアンキはただ「一番」といつているだけであり、どんな意味であるにせよ「一番」とは明確

に異なる「一番りっぱ」で置き換えるのは誤りではないか、ということです。すでに論じたとおり、文章2は、この作品の中でもっともよくヒタキの気持を、あるいは喜びと苦悩をあらわす言葉です。

フィクションですが、小鳥の喜びと苦悩をリアリティがあるように注意深く表現しなければなりません。「一番」という単純明快な、誰もがなじんでいる言葉でなければ、野生の小鳥であるヒタキの純粋な気持ちを伝えることはできないでしょう。ビアンキはこの作品の全体でわずか二回しか使っていないはずで、その二回も言いあらわし方が違います。その違いを重くみた方がよい、という考え方もありうるワケで、置き換え方が粗雑にすぎる、という印象があります。

「誰のくちばしがもつといいか」と、ヒタキが旅にでたきつかけは、シメが枝にとまったまま近くのサクラランボをとり、強力なくちばしで楽々と割って食べるのを見て、うらやましくなったからでした。効率よく食物が手に入るくちばしを求める、目的の明確な旅です。

同じ文章は私の訳では「いろんなくちばしを見てすばらしかつたけど、どれが一番かまだ分かりません」（文章2）です。訳文全体の異同は別にして、この文章の一番は（すなわち、ビアンキがいう一番とは）文脈から「一番効率よく食物が手に入るくちばし」です。それを田中氏は機能を無視して「一番りっぱなくちばし」と訳しているのですから、進んでした誤訳としかいい

ようがないのです。

さらに奇異なのは、田中氏の「りっぱ」には、この物語の読者には知りようのない特異な意味がある、という背景というか事情です。

この物語でビアンキは鳥のくちばしの特徴を動物分類学の手法で正確に記述した上で、それらの特徴は一言でいえばこうなると、簡潔にまとめられています。例えば、イスカの十字になつたくちばしの特徴では、イスカの説明を聞いたヒタキの感想の言葉として「（君のくちばしの方が）よく出来ているね」と一言でまとめました。この特徴のまとめである「よく出来ている」を田中氏は「（まあ、なんて）りっぱなくちばしなかしら」と「りっぱ」に置き換える、という変則的な訳し方をしました。

同じようにタシギについては、「優れたクチバシ」の「優れた」を「りっぱ」に、ハシビロガモについては「ほんもののくちばし」の「ほんもの」を「りっぱ」に、ペリカンについては「なんとものすこいくちばし」の「ものすこい」を「りっぱ」に置き換えました。

これらの記述はフィクションの枠組みの中のノンフィクションです。生態学的な記述であって、正確に訳す必要があります。イスカのくちばしが「よく出来ている」とは「機能的である」ということで機能そのものの形容ですが、「りっぱ」と訳してはビアンキの意図とは無関係の言葉の羅列でしょう。文学作品の翻訳で、そのようなことが許されることはありません。

タシギの「優れた」も機能をいつているのに、「りっぱ」では見当はずれです。ペリカンの項の「ものすこい」は、ヒタキが、大量の魚を溜めてみせてくれたペリカンのくちばしの使い方を知って発した賞賛と驚きの言葉です。これも「りっぱ」ではナンセンスというより他ありません。その他、多くのくちばしの特徴の形容を田中氏は「りっぱ」で置き換えました。

というわけで、もともとは違う言葉であったものが同じ「りっぱ」に変貌して、物語のそこらじゅうにばらまかれる、という不自然な事態です。詩人・ナチュラリスト、ビアンキの表現の工夫が、平板で硬直した意味のない表現に変わってしまいました。

このように実にさまざまなくちばしの機能の形容を「りっぱ」で置き換えているのですから、読者が「りっぱ」が多用されていることに疑問を持つても不思議はないでしょう。けれど、ロシア語の壁に阻まれて、なぜかを推し量ることは不可能でした。

そして読者は「結び」の項で、新たに「一番」と結び合わされた合成語「一番りっぱ」に出会います。いったいこれは何だ、と考えはじめたら、読者はどうなるでしょう。であつたいろいろな「りっぱ」が一番が結びついた言葉です。少なくとも目眩がするでしょう。

ビアンキがいう一番とは単純明快に「もっとも効率よく食物が手に入るくちばし」であるのに、読者は合成語「一番りっぱ」で四苦八苦しなればなりません。

そしてさらに上があります。巡り巡って

ということ、再び題名ですが、「ワケの分からない性格の合成語「一番りっぱ」を、もともと比較級である『だれのくちばしがもつといいか』の「もつといいか」に置き換えて、『くちばしどれが一番りっぱ?』としたものなのです。

ビアンキとスラトコフがシートンを動物文学の新しいリアリズムの創始者とたたえた文章は、ビアンキの最晩年のものでしょう。同じロシア語版『一人の小さなインディアン』（1960年）の解説で、二人はこゝも書いています。「私たちは、それぞれに少年時代をシートンの作品からよきヒントと考えを得て過ごしました」。シートンはキプリングと語り合い、子どもに読んでもらおうと、『一人の小さなインディアン』の構想をねりました。

私は二人がシートン作品を少年時代から読み、大人になってシートンをリアリズム文学の書き手と書いたことに非常な興味を覚えます。それは彼ら二人もまたナチュラリストであり、それゆえにリアリズム文学の書き手であることを物語っているからです。

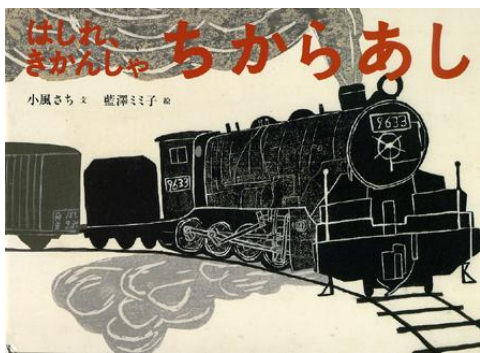
ね、この本読んだ?

『クリスマスのふしぎなほこ』（長谷川 摂子・文 斉藤俊行・絵 780円 福音館書店）

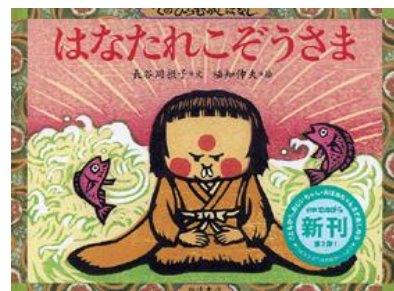


きみはどうやってサンタさんが、きみのもとまでプレゼントをもつてきてくれるか知りたくないか? この本の主人公の男の子は「ふしぎなほこ」をみつけたんだな。そのほこの中を、そーとのぞいたらね……。きみもサンタさんの世界を、ちよつとだけのぞくことができる絵本なんだよ、この本はね!

『はしれきかんしゃ ちからあし』（小風 さち・文 藍澤三三子・絵 1575円 福音館書店）



時の流れを背景に、蒸気機関車「ちからあし」が活躍する姿を描いた絵本。貨物専用の「ちからあし」は、力強く人々の役に立っていました。戦争の時代は戦争に使う道具を運んだのでした。戦後社会の復興のために貨物車を引いて走った。町が復興していくと、だんだん蒸気機関車の仲間たちは姿を消していきました。やがて「ちからあし」は……。



『はなたれこぞうさま』（長谷川摂子・文 福和伸夫・絵 798円 岩波書店）
じいさんは橋の上から売れ残ったたきぎを、川底のりゅうじんさまにささげた。すると、りゅうじんさまから「はなたれこぞうさま」をささくれた。薄汚れて、はなたれただけ、こぞうさまは何でも願いを叶えてくれるという。

じいさまは……。てのひらむかしばなしシリーズの新作として、他に『三まいのおふだ』（きむらよしお・絵）『いつすんぼうし』（荒井良二・絵）が同時に発売されました。第2期として全十巻を出版予定。

『秋ものがたり』（野上暁・編 1890円 偕成社）
サブタイトルが「ものがたり12か月」とあるように、



これは月ごとの短編や詩を収録したアンソロジーだ。最初『夏ものがたり』が出た。紹介しよ



たら、季節が進んで「秋」が出てしまった。次は「冬」でさらに「春」が出る。上質な短編は読んだ後気分がいい。作家の個性（文体）は文学の醍醐味だ！

パティントン生誕の五十周年を記念して、シリーズに新刊3冊がくわりました。

『パティントン街へ行く』『パティントンのラストダンス』『パティントンの大切な家族』（マイケル・ボンド・作 ベギー・

フォートナム・画 田中琢治・松岡享子・訳 各1365円 福音館書店）

これでパティントンのシリーズは全部で10冊になりました。ところで、パティントンってどんなやつ？ 名前・パティントン・ブラウン 出身地・「暗黒の地」ペルー

体重・16ポンド（約7キロ）
住所・ロンドン市ウインザーガーデン 32番地

性格・新しいもの好きで、好奇心旺盛・・・（福音館の「パティントン大好き！」のリーフレットより）

パティントンのおはなしは、このパティントンの「性格・新しいもの好きで好奇心旺盛」ってところが物語の核心部なんだな。パティントンの引き起こし事件の数々はこの性格

によるのだし、それが何ともユーモラスで愛らしいんだな。さて今度のおはなしは・・・店にいらした方、リーフレット差し上げます。

カレンダーなど

2009年のカレンダー入荷しました。

『カレンダーのはらうた』

くどうなおこ・詩 ほてはまたかし・版画 1785円

『ぐるんぱのカレンダー』

西内ミナミ・作 堀内誠一・絵 福音館書店 1400円

『ぐりとぐらのカレンダー』

中川李枝子・作 山脇百合子・絵 福音館書店 1400円

『森へようこそ』『卓上版森へようこそ』

村上康成・作 ユニオンサーブス 1575円 卓上版1365円

『ターシャ・チューダー』

メディア・ファクトリー 1680円

輸入カレンダー

『くまのプーさん カレンダー』

Gracie de France 2240円

『ビーター・ラビット カレンダー』

Viking社 1920円

福音館から『エルマーの冒険 すごくく』 580円

他にも季節のおもしろグッズは、入ってきます。続きは次号紹介します。

雑記帳

先日、安倍奥の八紘嶺に登った。安倍奥の山は久しぶりだ。

ぼくは高校時代、知人の属する山岳会の人たちに連れられて、やはり安倍奥の十枚山に登ったのが最初だった。季節は春だったか、冬の初めだったか？ 登山道の一部が凍結していて、先頭の人が滑って、滑落してしまった。幸い怪我は、捻挫程度だったが、みんなで交代で背負ったり、支えたりして、夕方暗くなって下山した。安倍奥の山は、ぼくの登山の原点だ。この日、1ぼくは梅ヶ島温泉に車を置いて2時間半で頂上。1時間半で戻って、温泉に入り、お昼過ぎには家にいた。ただそれだけのこと。